

堺市・『擁護璽』, 神から賜った璽^{おしで}

長尾 武*

The memorial of the Ansei Nankai Earthquake Tsunami 'Yogoji' in Sakai City .

The seal of protection from the God..

Takeshi Nagao

Tennojichominami 3-8-9, Abenoku, Osaka , 545-0002, Japan

In 1854 the Ansei Nankai Earthquake (M8.4) which occurred off the Kii Peninsula in the bottom of the Pacific Ocean, hit Sakai Town and a tsunami was subsequently generated . The memorial 'Yogoji' said that people in Sakai fled to large yards at the shrines . As a result they were not injured . But they heard that people in other districts fled into boats and were drowned by the tsunami . There are discrepancies between what is inscribed on the memorial and what are found in other documents . Firstly, the memorial said that people in Sakai did not flee into boats, but fled to the yards at the shrines . The readers of the memorial are apt to judge that people in Sakai learned the lessons of the Hoei Tsunami and did not flee into boats . According to 'The History of Sakai City vol.5', when the Iga Ueno Earthquake occurred, people in Sakai fled to many places, the seaside, into boats ,to the yards of shrines and temples . Secondly, 'Yogoji' said that nobody was injured from the earthquakes and the tsunami in Sakai . According to 'The map of the tsunami in Sakai', it states that the fatalities were 57 . I think that 'Yogoji' is an important historical memorial , but we should not make judgments from a single document.

Keywords: Ansei, Nankai Earthquake, Tsunami, Sakai .

§1. はじめに

南海地震は太平洋の海底, 南海トラフを震源として M8.0 以上の地震が, 90 年 ~ 150 年の間隔で起こってきた。東海地震と連動して南海地震が同時に起こったと言われている M8.6 の規模の大きい宝永地震クラスでは大阪地方で震度 5 ~ 7 [都司(2007)], 比較的規模の小さい昭和南海地震クラスで震度 4 程度の揺れに見舞われる [宇佐美(2003)]。また, 津波が大阪湾に進入し, 湾岸の地域に甚大な被害を与えてきた。宝永・安政の南海地震津波では 2.5 ~ 3.0m の高さの津波が大阪を襲ったと推測されている [羽鳥(1980), 渡辺(1998), 長尾(2008a)]。

大阪は江戸時代に宝永地震津波(1707 年), 安政南海地震津波(1854 年)の二度, 津波に襲われて大被害を被った。大阪府内には安政南海地震津波を記録した二つの石碑がある¹。一つは大阪市浪速区幸町三丁目, 木津川に架かる大正橋の

東詰にある『大地震両川口津浪記』石碑である。この石碑は津波犠牲者を供養するとともに, 将来やって来るであろう津波への備えを忘れないように警告を発しているのである [長尾(2007, 2008a)]。もう一つの石碑は堺市大浜公園内にある『擁護璽』(Fig. 1)である。本研究では、この石碑の碑文について検討を加えたい。

『擁護璽』石碑の裏面には嘉永七年(安政元年)六月十四日(1854・7・9)の伊賀上野地震から始まり, 同年十一月四日(1854・12・23)の東海地震, 翌日五日(24)の南海地震とそれに伴う津波の記録が記されている。四日・五日の地震と五日に襲った津波で多数の家屋が破損し, 橋が八つも落ちた。

大きな地震と津波であったが, 堺の人々は神社に避難して無事であったということである。それで, 人々は三つの神社に感謝し, そして, 将来も災いが無いように産土神に願って『擁護璽』を建立したのであった。碑文の選者は名吏といわれた伊藤松

* 〒545-0002 大阪府大阪市阿倍野区天王寺町南 3-8-9

軒である[堺市(1936)]。



Fig. 1. The memorial of the Ansei Nankai Earthquake Tsunami 'Yogoji' in Ohama park, Sakai City. 堺市大浜公園内にある擁護璽・裏面(下図)の碑文は下部が剥離している。

筆者は『擁護璽』を研究に利用する際に、二つの問題点があることに気づいた。第一に、研究を行う出発点となる『擁護璽』原文中に判読に困難な箇所があり、過去に行われた判読文に相違があった。原文の判読を正確におこない、意味を正しく把握する必要がある。現在、『擁護璽』は風化が進み、一部が欠損している。幸い、堺市立中央図書館に

完全な状態の拓本の写真があり、利用できた。第二に、『擁護璽』に記載してあることだけで、堺での安政南海地震津波被害を判断するべきではないと考えている。つまり、堺では死者や怪我人が無かったとか、堺では宝永地震津波の教訓がよく生かされて、地震の際に船に避難しなかった等の見解が見られる[都司(2005)、伊藤(2005)]。

一つだけの史料の記述から結論を導くべきではない。また、史料が作成された目的や各地域の当時の地形や人々の経済活動、生活様式も合わせて考える必要がある。堺の安政南海地震・津波の実像を知るために、『擁護璽』以外にも、いくつかの重要な史料がある。

一つは、中井(1995)が紹介し、堺での被害が大規模であったと推測する根拠となった『泉州堺津波之絵図』(Fig. 2, 3)である。この史料は堺での津波による被害や浸水地域を示す貴重な史料である。また、落ちた橋は8橋、死者は57人と記載されている。この史料に記載されている事項は『擁護璽』の記載と一致する点と、相違する点がある。筆者はこれら二つの史料を検討し、さらに、『堺市史』編纂時に収集された『堺市史史料』所載の堺市熊野町西三丁・真木甚之輔蔵『嘉永七年大地震記』や、矢内(2003)で紹介された堺真宗寺蔵『地震記』、そして、『大阪府全志』、『堺市史』その他の文献、史料をも参照して、擁護璽記載の事項について検討したい。

§2 大阪府堺市の安政南海地震津波碑(『擁護璽』)

南海本線堺市駅の南西約1.5km、大浜公園の入口からすぐ左の小道をたどって、蘇鉄山という小さな丘の麓、樹木の茂るめだたない場所に、安政南海地震津波を記録した石碑、『擁護璽』がある。高さ2.7mの花崗岩の自然石に『擁護璽』と三文字が大きく刻まれている。そして裏面には砂岩の板がはめ込まれて、くずし字で碑文が刻まれている。内容は、嘉永七年六月の伊賀上野地震に始まり、十一月に起こった安政東海・南海両地震と津波による堺への影響を記録している。

後世の人々に地震・津波災害への注意を促し、将来も堺の町が無事であるように祈って建立された貴重な文化遺産なのである。筆者が初めて『擁護璽』を訪れたとき、場所が分からなかった。行き会う人に尋ねても、誰一人知らなかった。公園事務所

で尋ねてようやく場所が分かった。

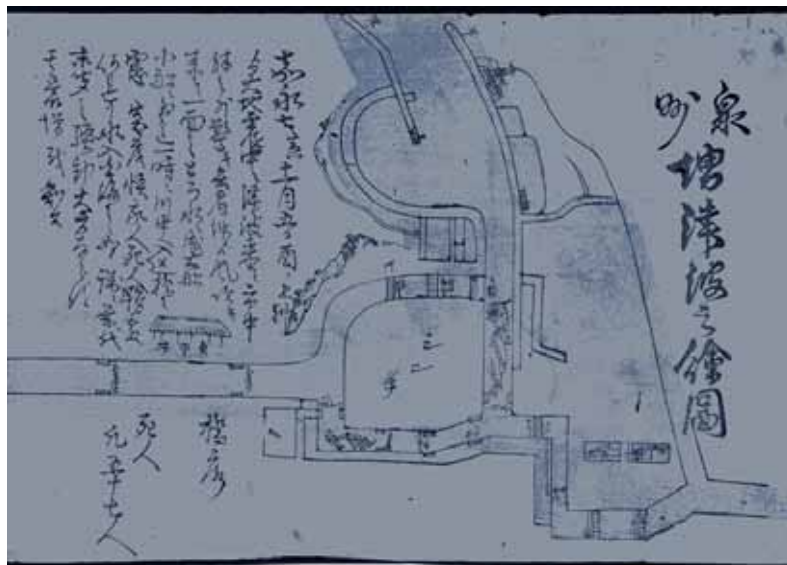


Fig. 2 The map of the Tsunami in Sakai in Sensyu. The original is in Sakai City Museum.
This map is a copy owned by Sakai city Center Library. West is at the top and East at the bottom.
堺市博物館所蔵『泉州堺津波之絵図』、堺市立中央図書館蔵の複製図をコピーした。
この絵図は上が西、下が東として描かれている。

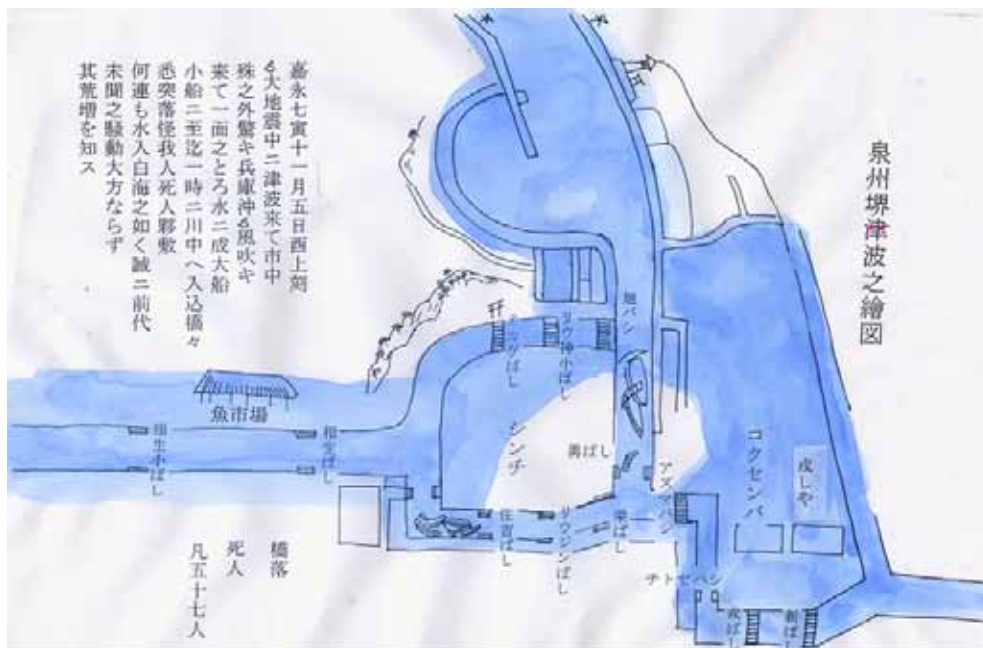


Fig. 3. The copy of 'The map of the Tsunami in Sakai in Sensyu'.

The shaded area shows the inundation..

泉州堺津波之絵図の模写。戎島、新地で浸水した。新地の東側の内川へ多くの船が入込み橋が落ちたが、西側の旭川へは船が入込まず、橋は無事であった。新地の人々は橋を渡って、地盤の高い西側へ避難したと推測される。



Fig. 4 The map of Sakai Town in 1863. The original is in the Center Library of Sakai City.

On this map, West is at the top and East is on the bottom.

本図は堺市立中央図書館蔵『文久三年癸亥改正堺絵図』のコピーを参照し模写した。本図は上が西、下が東である。図中の川、堀川 の名称で原図に記載がなかったものは、『大阪府全志』第5巻を参照して記述した。御台場は安政年間に築造された。安政元年の津波の来襲時には無かった。堺市街地の東部には多くの寺々が集中しているが、省略している。市街地の住民はこれらの寺々にも避難したと考えられる。

『擁護壘』は幕末から明治にかけての激動の時代、第二次大戦の空襲で堺の町が焦土と化した姿を見つめてきたが、その間に、最初の建立の地から移転されている。堺の町が安政南海地震津波に襲われた後、『擁護壘』は御影山(Fig. 4)という標高 14m[大日本帝国陸地測量部(1887)]の小高い丘の上に建立された[井上(1922)]。この丘は天保七年(1836)、中ノ町から南半町に通じる新内川を開削した時に、その土を西岸に盛り上げて造成されたのであった。その後、『擁護壘』は明治二八年(1895)に大浜公園内に移転された。現在の大浜公園の地には安政二年(1855)砲台が築かれ、明治政府になってからは陸軍省の管轄となった。明治十二年(1879)に堺県が海防上必要な際に返還するという条件で、無料使用の許可を得て、公園としたのであった。明治十四年

(1881)、堺県が廃止されて、大浜公園は大阪府の管轄に移り、更に明治二二年(1889)に堺市の所属となった。明治三六年(1903)、第五回内国勸業博覧会が大阪市で開設された時、大浜公園内に東洋一と言われた水族館が建設され、『擁護壘』はその構内南方の丘陵の下にあったのである。

『擁護壘』と大きく彫られた石碑の裏面(Fig. 1 下図)に安政南海地震津波についての記述がある。碑文は一部分が剥離し読めなくなっている。堺市立中央図書館に欠損以前に採られた拓本があり、参照した。また、判読文については井上(1922)、堺市役所(年不明)、堺市役所(1929)、武者(1950)、中井(1995)を参考にした。また、堺市が『擁護壘』の傍に設置した案内板の判読文も参照した。



Fig 5 The rubbing of the memorial 'Yogoji'.

The original is in Sakai City Center Library.

擁護鹽の裏面に刻まれた碑文の拓本、安政南海地震・津波について書かれている。(堺市立中央図書館蔵)

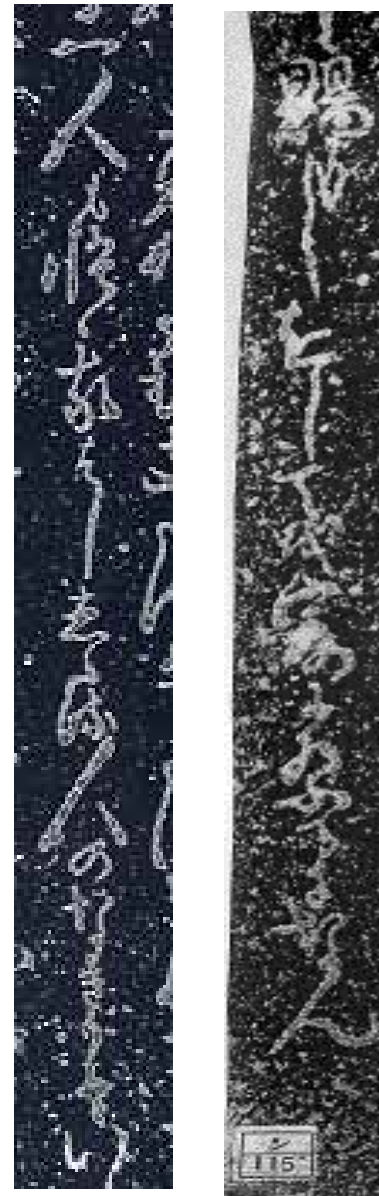


Fig. 6 There are two difficult lines to read in the inscription. 難読箇所 抜粋

(a) Left. 7th line.

(b) Right. Last Line.

§3 『擁護璽』の判読文(碑文の拓本, Fig. 5)

嘉永七寅のとし六月十四日地震あらあらしく、またも十一月四日朝、五日夕に」つよくゆり動き、五日はゆるとその沖のかたおとろおとろしくなりふためき、暮」なんころ俄に津浪たちて川すしへけハしく込いり、引もまたはけしく、川通りに」繫し船ともハ碇綱きれ、棹さすちからたらす、矢庭に走入り、そこよこへつきあて」橋」八つも崩落ち、船はわれ或はつよく損して見るおそろしさいわんかたなし。

地震津浪に家」潰れ、ぬりこめかたむきたるはさはなれと、里人ハ神社の廣庭に集りてさけ居たるか、これか」ために一人も怪我はししたる人のなきこそいといとめてたかりける。

余所の入江川筋にハ」地震をよけるに小舟に乗り家うち円居し、したりかほにありけるか、大船いやかうえ高汐のために」はせ入に敷かれて命落せしもの数しれすとや。

まさに川へ逃除たるゆへなり、ゆめゆめ地震つよく」川すしへ船に乗りさける事すましきなり。

むかし宝永年中にもこたひにおなし地震つよく」津浪もあり、船に除け居て命をとらるゝもの多しとかや。

かゝるためしもあきらかなれハ、地震つよけれハ」津なみありと知るべきなり。

堺の人のつゝかもなきありかたさに、産神神明宮、三村宮、天満宮に」そのよろこひの幣を捧げ、後の世までも患のなきを祈りて賜りしをしてを爰に祭るになん」。

原文の改行箇所を」で示した。

原文には句読点が無く、長尾が付け加えた。

(1) 原文中の難読箇所、判読文 9~10 行目(原文 7 行目 Fig. 6(a))について

井上(1922)は、「一人も怪我したる人のなきこそ」と判読している。明らかに原文の文字を省略している。

『堺市史史料』は「一人も怪我はしたる人のなきこそ」と判読している。

堺市役所(1929)は、「一人も怪我はしたる人のなきこそ」と判読している。

武者(1951)は「一人も怪我はしたる人のなきこそ」と判読し、堺市役所(1929)と同じ。

中井(1995)は「一人も怪我はしたる人のなきこそ」と判読、堺市役所(1929)と同じ。

『擁護璽』の傍らにある案内板は「一人も怪我はしたる人のなきこそ」と判読し、『堺市史史料』と同じ。現代語訳では、怪我をした人は一人もおらずとしている。

筆者は『堺市史史料』および、案内板が最も原文に忠実と考えている。案内板の解説文の作成に関わ

られた堺市博物館学芸員の矢内一磨氏に、『擁護璽』の判読文と現代語訳について質問したところ、判読文については、『堺市史史料』および、案内板と同じ、「一人も怪我はしたる人のなきこそ」と読まれているが、現代語訳については「一人も怪我したり、死んだりした人が無かった」とするのが良いのではないだろうか」とご教示をいただいた。筆者は矢内氏の現代語訳にしたがった。

(2) 原文中の難読箇所、判読文最後の行(原文最後の行 Fig. 6(b))について

井上(1922)は「賜りしをしてを」の部分で判読文から欠落させている。「後の世までも患のなきを祈りて爰に祭るになん」となっている。

『堺市史史料』は「賜りしをしてを爰に祭るになん」と判読しているが、「をして」の部分にママと横に添え書きを入れている。「をして」の意味を理解していないようである。

堺市役所(1929)には「賜りしをしてを爰に祭るになん」と記載しているが、意味や説明を書かれていない。

武者(1951)は「賜りしをして爰に祭るになん」と判読している。「を」が一字欠落している。

中井(1995)は「賜りしを爰に祭るになん」と判読している。原文から三字欠落させてしまった。

『擁護璽』の傍らにある案内板は『堺市史史料』、[堺市役所(1929)]と同じく、「賜りしをしてを爰に祭るになん」と判読しているが、現代語訳には、この部分の説明がない。

筆者は『堺市史史料』、[堺市役所(1929)]、案内板の読みが正しいと考えている。「をして」の意味を『広辞苑』で調べたところ、「押手とは手のひらに朱・墨などを塗り、文書に押して印章とすること」とある。また、押手文とは、印形の押してある文書と説明している。『大字典』には「璽」のことを、「しるし」「おしで」としている。以上のことから、「をして」とは『擁護璽』を指していることがわかる。

§4 『擁護璽』(口語訳)

嘉永七年六月十四日(1854・7・9)にはげしい地震があった。そしてまたも十一月四日(12・23)朝、五日(12・24)夕に強く揺れ動き、五日では沖の方が恐ろしく鳴り響き、日暮れ頃、にわかに津波が起こって、川筋へ激しく入込み、引きもまた激しく、川通(河道)に繋いでいた多数の船の碇綱が切れ、流されないよ

うに棹さす力足らず、急に走り出し、あちこちへ突き当たって、橋が八つも崩れ落ちた。船は割れたり、大きく破損し、見るも恐ろしく、言葉で言い表せないくらいであった。

地震と津波で家が潰れたり、土蔵が傾いたりしたものも多かったが、里人は神社の広庭に集まり、避難した。そのため一人も怪我したり死んだりした人が無かったことが、たいへん幸いなことであった。

他所の入江や川筋では、地震の避難に家族みんなが小舟に乗って、安心していたが、津波によって大船が入込み、下敷きとなって命を落とした者が数知れないということである。まさに、川へ避難したためである。

どんなことがあっても、地震が強い時は船に乗って川筋へ避難してはならない。昔、宝永年中にも、今回と同じく、地震が強く、津波もあった。船に避難して命を失う者が多かったと聞いている。このような例で明らかのように、地震が強いときは、津波があることを知るべきである。堺の人々が無事であったことが有難く、産土神の神明宮、三村宮、天満宮にその喜びの幣を捧げ、後の世も災いが無いことを祈って賜った

幣(『擁護璽』)をここに祭るのである。

§5 『擁護璽』の碑文解説と批評

十一月四日朝の東海地震では揺れは激しかった。翌日五日、夕方の南海地震では激しい揺れの後、日暮れ頃に、堺の港に津波が押し寄せた。津波は川筋に入込み、繋がれていた船の碇綱を引きちぎり、船はあちこちにぶつかって橋が八つも崩れ落ちた。多数の船が破船し、また、大きな損害を受けた。

堺の町では地震と津波によって、多くの家が潰れたり土蔵が傾いたりしたが、里人は神社の広い庭に避難した。そのため一人も怪我人が無かったと記載されている。

他所では、地震に驚いて船に逃れたために、津波に襲われて命を落とした人が多いと聞いている。ここで述べている他所とは、大坂のことである。大坂の西横堀川より西では、地震の揺れを恐れて、堀川の川船に逃れた人々が多く、その後、襲ってきた津波によって多数の犠牲者が出たのであった²。

地震が強いときには、絶対に船に避難してはならないと注意している。

堺の人々は、災害の後、無事であったことを感謝して、産土神である神明宮・三村宮・天満宮に喜びの

幣を奉納し、後の世まで災いが無いように祈り、神から賜った^{おしで}璽をここに祭ったというのである。

津波で大被害を受けた大阪・大正橋にある『大地震両川口津浪記』は、犠牲者への供養と後世の人々への警告のために建てられたのであり、教訓の継承が主な目的であった。

『擁護璽』は堺の町を災害から守ってくれたことを感謝し、そして、今後も守ってくれるように願って、神から賜った^{おしで}璽を祀るために建てられたのであった。

『大地震両川口津浪記』と『擁護璽』とは建立の目的を異にしているのである。

『擁護璽』では神社や神を重視した記述内容となっている。それゆえ、この点を考慮して読む必要がある。『擁護璽』は堺での地震・津波の様子を知る上で貴重な文化遺産なのであるが、どんな史料であれ、それを作成した人々の考え方や背景を考慮する必要がある。

§6 碑文中の三つの神社について

碑文に記載されている三つの神社のうち、神明宮は神明神社のことであるが、堺に二つの神明神社があった。一つは神明町東一丁にあり(Fig. 4)、白鳳年間に創建されたといわれる由緒ある神社である。明治維新以前は方一町の境内を有していた。堺の住民からの崇信も厚く、神明宮といえば、この神社をさすと思われる。ただし、明治四一年(1908)に菅原神社に合祀された[井上(1922)]。現在はクスノキと井戸が残るのみで、そこが神社であったということを記した石碑などもない。

もう一つの神明神社は天保七年(1836)の川浚の時に創建された。社殿の普請が九日であったので、九日を一字に縮めて旭社とよばれた[井上(1922)]。しかし、神明神社の由緒書では天保三年(1832)に佐々木長門という人が宇迦之御魂神(稲荷)を祀って旭社としていた。その後、天保十二年(1841)、堺奉行水野若狭守が新地発展のために稲荷社を新地郷の産土神として奉斎することを命じたが、この年を神明社の創建としている。境内には、天保四年の年号が入った灯笼が一对あり、神社の由緒書を裏付けている。

文久三年(1863)改正堺絵図(Fig. 4)では『神明』とのみ記されている(原図では神明であるが、拙稿では旭神明宮と記した)。この神社は新地の西側の堀川の

西岸にあり、付近には川浚によって得られた土砂で造られた小高い丘が続いていた。

『擁護璽』が現在地に移設される以前に建てられていた御影山はそれらの丘の中でも最も高かった。神社のあった地名は旭町であった。慶応元年(1865)に新地の栄橋通二丁の現在の地に移転された。

津波によって多くの橋が落橋したが、浸水した新地と旭神明社を結ぶ三つの橋が落橋しなかった³。新地の住民の多くが旭神明社の付近の丘に避難したと考えられる。このような点を勘案すると、『擁護璽』に記載の神明宮は旭神明社を含めるべきであろう。

三村宮は甲斐町東一丁にあり、開口神社のことである。塩土老翁神を開口村に祀ったのが創祀である。天永四年(1113)に原村の素盞鳴命、木戸村の生国魂神を合祀したことから、三村宮と呼ばれるようになった。これより先、天平四年(732)行基が境内に寺院を創建し、後に弘法大師がこの寺を大念寺と名づけ、人々は大寺さんと呼んでいた。境内の面積は 4434 坪[井上(1922)]、明治の神仏分離令で寺院は廃絶した。最初に『擁護璽』が建立されたという御影山の麓に弘化以後、三村宮の神輿の休所が設けられた[堺市役所(1930)]。

天満宮は菅原神社のことであり、戎之町東二丁にある、菅原道真・天穗日命・野見宿禰を祀る。境内には常楽寺という天台宗の寺院があったが、明治の神仏分離令で廃絶した。境内の面積は 3873 坪であった[井上(1922)]。

神明宮、三村宮、天満宮の三つの神社のうち、二つは寺院を有する神社であった。したがって、神社に避難したことは、寺院へ避難したことであった。しかし、そのことは述べられていないのである。

三つの神社の中で神明宮を第一にあげている理由は、神明神社が天照大神を祭神としていることから、幕末に伊勢神宮への信仰が盛んであった風潮を反映していること、また、神明宮が寺院を持たない神社であったからであろう。

『擁護璽』は熱心に産土神・伊勢神宮を信仰する人々によって建立されたと考えられる。

§7 神社以外の避難場所

『擁護璽』には、人々は神社の広庭に避難したとあり、他所のように船に避難した人々があったことについて記述していない。この碑文の記述から、堺では大坂と違って、宝永地震津波の教訓がよく守られ、船に避難することが無かったと判断してしまいがちである。

はたして、実際にそうだったのだろうか。

堺市役所(1930)は真木氏記録⁴を引用し、嘉永七年(安政元年)六月に起こった伊賀上野地震の際に、人々が避難した場所を、次のように記述している。「船中に或は大浜、宿院、大寺、天神、神明社等に避難して只管天佑を祈った(以下省略)」

地震の際に避難した場所として船中を第一番にあげているのである。次に海岸をあげている。堺の人々も、大坂の人々と同様に、地震の際に船に逃れてはならないという宝永地震津波の教訓を忘れていたといえるだろう。

堺でも、地震の際に船中や海岸に避難する者があった。ただし、堺は大坂と違って堀川が市中を縦横に走っていなかったから、船より、広い庭を持つ神社や寺院へ避難する人が多かったのである。

船に逃れた人々が多かった大坂の下船場(西横堀川より西)では道路が狭く、避難できる広い寺社の庭も無く、堀川が火災や地震の際の避難場所となっていたのであった[伊勢戸(1983)]。

大坂でも下船場以外の地域では船に避難せず、大道や神社、寺院に避難したのであった。船に逃れたため、津波によって犠牲となった人々は西横堀川以西の堀川が縦横に走っている地域、木津川、安治川の流域に限られているのである[長尾(2007)]。

『堺市史』では避難場所として、大浜海岸や船中のほかに、宿院、大寺、天神、神明社等があげられている。大寺は三村宮、天神は天満宮である。これらの中、大寺、天神、神明社の三つの神社は『擁護璽』に記載の避難場所と同じである。『堺市史』ではさらに宿院(住吉社の御旅所)が加えられ、また、「神明社等に避難して」とあり、多数の神社、寺院へ避難したことを示唆している。堺には神社は 111 あり、寺院は 167 あった。神社の多くが寺院の鎮守社であったから[堺市役所(1930)]、当然に寺院へ避難した人々も多かったのである。

矢内一磨氏は真宗寺蔵『地震記』を翻刻されたが、それには六条成就寺の広場に避難の仮屋が設けられたと記載している[矢内(2003)]。これらの事例から、寺院も住民の避難場所となっていたことが分かる。

§8 怪我人や死者はいなかったのか？

『擁護璽』では、安政の地震・津波によって里人に怪我人や死者が一人も無かったとしている。しかし、この碑文には、多くの家が崩れたり、土蔵が傾いたりしたこと、また、八つの橋が落ち、多数の船が破船し

たと述べている。このような記述から、怪我人や死者が一人も無かったということは信じがたい。

堺の地震関係史料は大変少ない。『堺市史史料』所載の堺市熊野町西三丁・真木甚之輔蔵『嘉永七年大地震記』は、堺市史編纂のために収集された史料であるが、要約された史料で、地震の回数については克明に記載されているが、被害状況についてはまったく記載されていない。今では原文書が存在しないので、原本がどのように記述していたか、不明である。被害が少なかったことは確かであろう。

矢内(2003)は、近年、堺市教育委員会によって行われた古文書調査によって発見された『地震記』を紹介している。この史料は堺市神明町東三丁・真宗寺(Fig. 4)が所蔵し、記録者は浄土真宗僧侶朗含である。矢内氏は『地震記』を全文紹介され、現代語訳もされている。

『地震記』は嘉永七年六月十四日の伊賀上野地震の様子から安政三年三月二十日までの1年9ヶ月にわたって記述している。しかし、堺での死者や怪我人の記載はない。

『泉州堺津波之絵図』(Fig. 2, 3)では、死者が57人と記載されている。内川と土居川に囲まれた堺市街では津波による浸水も無かった。しかし、新地や戎島では浸水もあった。堺港に碇泊していた多数の船が津波によって運ばれて内川へ突っ込み八つも橋が落ちたのである。船は割れたり、破損した。死傷者は船に避難した人々(大坂のように多くなかった)や船頭であった可能性がある。死者の数57人は信頼できると思われる。

堺市役所(1930)は『擁護璽』を引用して、「死傷者は餘りなかったようであった」と述べ、死者57人という『泉州堺津波之絵図』の記述を紹介することも無く、地震・津波の被害の詳細な追求を止めてしまっている。堺での被害を過小評価してしまったのではないだろうか。

§9 まとめ

これまで、『擁護璽』を引用して、堺では宝永地震津波の教訓がよく生かされて、安政南海地震の際、船に逃れた人が無かったとか、怪我人や死者が無かったなどの見解がある。筆者は『擁護璽』の判読を正確に行い、意味を正しく把握することに努めた。何度も大浜公園を訪れたが、真夏の『擁護璽』の周囲は雑草に覆われ、蚊が多いのには閉口した。幸い、堺市立中央図書館に碑文の一部が剥落する前の完全

な拓本の写真があり、閲覧することができ大いに助かった。そして、碑文中の「をして」が「璽」(おしで)であることが判明した。碑文は『擁護璽』が神から賜ったものであると述べている。産土神や神社を重視する記述となっていて、堺における地震・津波を研究する史料として『擁護璽』を利用する際には、このような問題を考慮する必要がある。

堺の地震・津波を記録した史料は少ないが、『嘉永七年大地震記録』には、伊賀上野地震の際に、堺でも船に逃れた人々があったこと。また、寺院も避難場所として多くの人々が利用していたことを記録している。さらに、『地震記』にも、寺院が避難所として利用されたと述べている。『嘉永七年大地震記録』は伊賀上野地震が起こった6月から12月30日までの地震を克明に記録しており、堺の人々は大地震の恐怖に数ヶ月間脅かされたことがわかるのである。

謝辞

『擁護璽』の傍らに設置されている案内板に原文の判読文と現代語訳があり、大変参考になりました。また、堺市立中央図書館所蔵で擁護璽の拓本写真、泉州堺津波の絵図のコピーを閲覧させていただき、また、拙稿への掲載を許可していただきました。堺市博物館学芸員矢内一磨先生からは、『擁護璽』の判読と現代語訳について、また、堺の地震史料について多くのご教示をいただきました。

拙稿の作成について、宇佐美龍夫先生からご教示をいただきました。英文について、Jonathan Brown氏の援助を受けました。北原糸子先生には拙稿を査読していただき、論文の改善に大いに役立ちました。最後になりましたが、編集長の松浦律子先生にはお手数をおかけしました。お世話になりました皆様方にこの場をお借りして篤く御礼申し上げます。

対象地震：1854年安政南海地震

文 献

- 大日本帝国陸地測量部, 1887, 明治18年測量20年製版2万分1大阪近傍南部。
- 羽鳥徳太郎, 1980, 大阪府・和歌山県沿岸における宝永・安政南海道津波の調査, 東京大学地震研究所彙報, 55, 505-535.
- 井上正雄, 1922, 大阪府全志, 5, 1044pp., 230-234.
- 伊勢戸佐一郎, 1983, 大海嘯の碑, 大阪春秋, 36,

106-107.

- 伊藤純, 2005, 安政大地震の碑, 大阪の歴史と文化財, 15, 27-30.
- 武者金吉, 1951, 日本地震史料, 348-349
- 長尾武, 2007, 水都大坂を襲った津波(改訂版), 自家版, 169pp.
- 長尾武, 2008, 安政南海地震津波, 大阪への伝播時間と津波遡上高, 歴史地震, 23, 63-79
- 長尾武, 2008b, 安政南海地震津波の教訓, 自家版, 229pp.
- 中井正弘, 1995, 堺・大浜の安政大地震碑とカワラ版, 大坂春秋, 78, 93-95.
- 大阪市防災会議, 2005, 東南海・南海地震津波対策推進計画, 29pp.
- 堺市, 1936, 堺市風水害誌, , 754pp. 32.
- 堺市役所, 年不明, 堺市史史料, 58, 土木 7.
- 堺市役所, 1929, 堺市史, 1, 523pp., 62-63.
- 堺市役所, 1930, 堺市史, 3, 1215pp. 631-632; 718; 724-725.
- 都司嘉宣, 2005, 巻頭随想 大阪と堺の石碑に刻まれた先人の災害遺訓, 季刊 消防科学と情報, 82, 消防科学総合センター.
- 都司嘉宣, 2007, 大阪府における宝永地震(1707)および安政南海地震(1854)の詳細震度分布, 歴史地震, 22, 203.
- 宇佐美龍夫, 2003, 最新版・日本被害地震総覧, 東京大学出版会, 605pp.
- 矢内一磨, 2002, 幕末の大地震と泉州堺・堺真宗寺蔵『地震記』を中心に, 堺市博物館報, 21, 12-23.
- 渡辺偉夫, 1998, 日本被害津波総覧(第2版), 東京大学出版会, 238pp., 96.

註

¹ 安政元年の地震・津波について長文で記している石碑は大阪府下では『大地震両川口津浪記』と『擁護璽』の二つであるが, 安政元年の地震・津波による犠牲者を供養した石碑は大阪市内では四天王寺, 生野区舍利寺にもある。また, 此花区西島五丁目, 新淀川堤防下にある常吉新田開墾地主常吉庄左衛門の墓に安政三年海嘯溺死者各位之霊と刻まれているが安政三年は安政元年の誤りという見解が地元では有力である。

² 津波による溺死者数は大坂三郷で『御触及口達』によれば, 273 人, また, 大坂での溺死者数について, 『鍾奇斎日々雑記』には 2600 人, 『鈴木大雑集』には 7000 人とある。筆者は大坂での溺死者数を 1500 人程度と考えている[長尾(2008b)]p84-86。

³ 堺市博物館蔵『泉州堺津波之絵図』, 堺市立中央図書館蔵のコピーを利用した。

⁴ 真木甚之輔蔵『嘉永七年大地震記録』(堺市立中央図書館蔵『堺市史史料』58・土木・7 に所収), 原本は地震の詳細な記録であったと推定されるが, 現在はその中から抽出した記録しか残っていない。